

# 劇場文化の発展に寄与する プロフェッショナル向けのプログラム

普及教育事業は、子供たちや地域の人々だけが対象ではなく、劇場のもう一方の使い手 — プロフェッショナル向けのプログラムも様々なものが行われている。その一端を公開。なかには、先々の公演につながっていく企画もあり、意義深いものだ。



無料で一般公開された「中村恩恵と仲間たち」のShowingより。 ©塚田洋一

財団法人埼玉県芸術文化振興財団は海外から作品を招聘するだけでなく、劇場自らが新しい作品を企画制作するなど、様々な形でコンテンポラリー・ダンスの発展に貢献している。オリジナル作品をつくるために、出演者のオーディションを兼ねたワークショップも開催している。

観るものの想像力を刺激する幻想的な作風で知られるインバル・ピント・カンパニーの芸術監督、インバル・ピントとアヴシャロム・ボラックによるダンス・ワークショップもそのひとつで、来年秋に上演が計画されている新作のための準備の第一歩として行われた。参加者の資格は、16歳以上で、クラシック・バレエ、またはコンテンポラリー・ダンスでの舞台経験が2年以上あるというもの。作品の一部を踊ったり、即興で振りをつけていくインバルとアヴシャロムに、参加者たちはおおいに刺激された模様。

「カンパニーのレパートリーを習えたことに加えて、バレエのレッスン、コンタクト・インプロヴィゼーションなど盛りだくさんの内容で多くを吸収することができた」

「2人の作品に対する考え方が聞けて、とても感銘を受けた」

などの感想が寄せられた。

一方、すでに上演した作品が、さらに発展していくケースもある。昨年、彩の国さいたま芸術劇場で自ら振り付けた『a play of a play』を上演し、大きな注目を集めた中村恩恵さんと出演者は、その成果をさらに発展させていきたいと、自らワークショップを提案。舞踊家としての自己の表現の手段を既に確立しているアーティストを対象としたインプロヴィゼーションを巡っての研究などを行い、最終的にそれは、伊藤キム、平山素子も加わり、無料でのショーイングへと発展した。

こうした活動が、アーティストたちのインスピレーションとなり、新たな創造につながっていくに違いない。



インバル・ピントさん(中央)の動きに合わせて踊る参加者たち。

## 「インバル・ピント・カンパニー ダンス・ワークショップ」

【実施日】7月26日(水)～28日(金)  
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大練習室  
【講師】インバル・ピント&アヴシャロム・ボラック、堀内充 【参加人数】25人

## 「中村恩恵と仲間たち Workshop and Showing」

Workshop  
【実施日】8月15日(火)～19日(土)、22日(火)～25日(金)  
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大練習室、同劇場 中稽古場1  
【講師】中村恩恵、松崎えり、佐藤知子、廣田あつ子、松本大樹、伊藤拓次  
【参加人数】約20名

Showing  
【実施日】8月26日(土) 【会場】彩の国さいたま芸術劇場 小ホール  
【出演】中村恩恵、松崎えり、佐藤知子、廣田あつ子、松本大樹、伊藤拓次、伊藤キム、平山素子

## G 劇場を裏で支えるプロを育む「ステージラフト」

公共ホールでの自主製作公演における舞台技術スタッフの関わり方について学習し、体験することを目的としたワークショップも、今夏行われた。財団法人地域創造と財団法人埼玉県芸術文化振興財団の共同主催によるもので、全国の公立ホール・劇場で舞台技術または事業企画・制作を担当する職員が対象。舞台、照明及び音響それぞれの舞台技術に関する基礎知識や問題点についての講義やディスカッション、舞台づくりの実習など、舞台技術業務に関して実践的に学習するという内容だ。特に今年はさいたまゴールド・シアター7月中間発表公演で上演された作品『Pro・cess』を題材に行い、この公演に携わった各専門家が講師に立ったほか、最終日の総合ゼミ(リハーサル)には、さいたまゴールド・シアター団員も参加して協力した。参加者からは「本番形式での各舞台操作研修がとてもよかった」「全国各地の同じ仕事をする人たちに会えたことはとてもはげみになる」と好評を得た。



講師陣から機器の操作方法について説明を受ける参加者たち。

【実施日】8月8日(火)～11日(金)  
【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大稽古場  
【講師】井上尊晶氏(演出)、小峰リリー氏(衣裳)、安津満美子氏(美術)、岩武武顕(照明)\*、市川悟(音響)\*、山田潤一(舞台)\*  
(※:(財)埼玉県芸術文化振興財団)  
【参加人数】31人

## 「さいたまゴールド・シアター」 団員紹介

蜷川幸雄の発案により、彩の国さいたま芸術劇場で4月に誕生した「さいたまゴールド・シアター」。夏休みも明け、さらに稽古に熱の入る団員46名を順にご紹介。

### 団員のみなさんへの質問

1. 入団の動機
2. 講師陣の指導で印象に残ること
3. 団の活動でどう変わった?
4. 中間発表の感想

### 高橋 清 (たかはしきよし)さん 79歳

演技経験はないものの、見事な白い鬚のため演技にも独特の雰囲気を出している高橋さん。団員たちからも「カシラ」の愛称で親しまれている。

1. 年齢制限のないこと、健康であること、経験は問わないというので応募しました。そして返事の来るまでの心地良い緊張感。こんな気持ちになったことは今までになかった。人生最後の挑戦で、生きてよかったと思いました。
2. 先生方は一生懸命やられていて、私のようなものでも皆さんと一緒に親切に指導して下さいるのが、なによりも難しく思っています。
3. 5月から週5日通学しましたが、毎日が新しく、楽しく過ごして来ました。
4. 初日のカーテンコールの時、涙が溢れてきましたが、抑えることが出来ませんでした。

### 滝澤多江 (たきざわたえ)さん 60歳

退職後、どんな趣味にも満足できなかった滝澤さんは、演技経験は一切なかったが「さいたまゴールド・シアター」に応募。今は一つのものに向かっていく達成感で一杯。

1. 義母・実母二人の人生が自分とダブリ、私にはこの先何があるのか、何が残るのかと自問する日々募集のニュースを耳にし、自分の可能性がそこに発見出来たら、こんなチャンスは二度とない!!と思ったら応募してました。
2. 初めての経験ばかりで、ヴォイス・ダンス・日舞・ムーヴメント……すべてに驚きと楽しさを感じております。
3. 消極的でいつも中途半端だった自分を発見。何事にも積極的になれた? ならうと努力している自分です。
4. 緊張のしっばなで、全身が固まっていた。最後、お客様の手拍でなんとも表現できない熱いものがこみ上げてきて、この感動を忘れず再びそのために頑張ろうと勇気をいただきました。

### 関根敏博 (せきねとしひろ)さん 76歳

大学でコンピューターを教えていた関根さんは、歌舞伎や新劇、そして「蜷川さんの作品はだいたい全部観ている」ほどの芝居好きだった。とは言え観る専門で、演劇の経験は高校時代にほんの少しだけ。それが「さいたまゴールド・シアター」に出会い、とうとう演じる側に、「でも、役者を貫き通すには、生活も大変だし、強い信念が必要」と今はつくづく感じるという。それだけに「我々も冷やかし半分では駄目。プロのつもりでやらなければならぬ」と思っている。

1. 芝居を後ろ側(作る側)から見たかった。
2. すべてのカリキュラムが体を動かすことに通じているので、健康を維持する意味で大変な難い。
3. 自分の心身を客観的に見られるようになった?
4. 自分の表現力の乏しさを恥づかしく思った。

### 田内一子

(たうちかずこ)さん 60歳

交通事故で痛めた足を乗り越えるために市民ミュージカルにあえて参加したという田内さん。「さいたまゴールドシアター」はまた新たな挑戦だ。

1. 38年間の勤めも今年3月で退職。これから何か自分のためにやりたいと思っていた矢先に募集を見て、蜷川さんの考えに感動してチャレンジしてみました。
2. 気力や体力の衰えを考慮して、私たちを高めるための苦心や心遣いに敬服しています。声を通す体づくり、感情を動かせる体づくりが好奇心がわいてきます。
3. 皆さんと目標に取り組み、創り上げていく喜びを味わいながら、年代の違う役に集中することにより、自分の考えを持ち、主張していかなければと、前向きに行動するようになってきました。
4. 蜷川さんの私たちを壊して創り上げようとする、言葉、目つき、震える態度に自分を前に押し出されるパワーを感じました。



©山下恒徳

### 高田誠治郎

(たかたせいじろう)さん 75歳

かつてはコピーライターとして活躍していた高田さんは、奥様からの薦めもあり応募。「俺は役者だから」と言いつつ、夏休みにはシェイクスピアを紐解き、ついには短い脚本を1本書いてしまった。書いて演じて、という日も来るかもしれない。

1. プロフェッショナルな技術を持った舞台俳優の育成を目指すという劇団設立の趣旨に惹かれました。自分に舞台俳優としての適性があるかどうかを知りたかったというのが参加の動機です。
2. 握手していただいた蜷川さんの手の暖かさ。やまとさんの情熱的な指導。どの先生も熱い心で指導してくださっているのが感じられます。
3. 変化? 脱皮の途中ということで、まだこれという変化はないと思います。
4. 演じている自分を見ているもう一人の自分がいることを感じ、それがイヤでたまらなかった。

### 谷川美枝 (たにかわよえ)さん 64歳

今夏、行われた中間発表会の初日で「何も感じず、自分は変なかなと思いましたが、今思えば、それほど(気持ち)緊張で固まっていた」という谷川さん。ミスで「セリフを忘れたんだ」と蜷川さんに指摘され、たショックが、俄然意欲に火をつけた。以来、吹っ切れたように、演技で新しい側面を見せている。

1. 「年齢を重ねたものがその個人史をベースに、身体表現によって、新しい自分に出会うことは可能ではないか」という蜷川さんの劇団創立の動機を読んで。
2. 蜷川さんからは、演出家がいなくて変われないことを、井上尊晶さんからは、生きてきた人生を活かすことを教わった。ヴォイス、ムーヴメント、日舞、ダンスの先生方のプロの目、気迫が刺激的。
3. 色々な方とだんだん自然に話が出来るようになった。
4. 先生方、スタッフ、観に来て下さった方に感謝。幸せな時を持ち、46名での公演が新たな楽しい光になっている。

### 高階真子 (たかしなしようこ)さん 70歳

高階さんの滑舌のよさとセリフ回しの上手さ、さらには本番での度胸のよさは、さすがはかつてNHKのアナウンサーとして7年間活躍したキャリアの賜物。ご主人の仕事の都合などで、その後、海外暮らしが長く、棚上げになっていた芝居への情熱が、「さいたまゴールド・シアター」の活動で解放されている様子だ。

1. 十代の頃から様々な理由で中断してきた芝居をまっとう出来るかもしれない、最後のチャンスに賭けた。
2. 蜷川さんの稽古で、「世界の二ナガワ」が「我々の二ナガワ」になる瞬間。松岡和子さんのシェイクスピアの講義も面白く有益だった。
3. 「本当に生きている」と感じる時が、「演技をしている時」になったこと。非現実の世界が現実を超えている感覚。また、楽しいので食べるのは忘れるが、お酒はさらにおいしくなった。
4. 稽古とは違う緊張感が楽しかった。本番が一番楽しいかもしれません。

### 柴田紘子 (しばたひろこ)さん 61歳

俳優養成所卒業後、結婚するまで俳優として活動。35年のブランクを経て、「2度目の初めの一步」の気持ちで臨んでいるという柴田さん。

1. 義父の介護など一段落し、「生きがい探し」を考えていた矢先募集を知り、思い切って高いハードルを跳ぶことにしたのです。
2. 講師の方々も皆、素晴らしい。ヴォイスのやまととのりこ先生のレッスンの簡潔情熱的な内容は、目からウロコが落ちること度々。発声する楽しさ、実感出来つつあります。感謝。
3. 歳をとる嫌悪感が薄れました。忘れた経験(思い出)を含めて、すべてリサイクルできそう(演技に活かそう)で。心の再生工場は稼働し始めました。どんな製品が……生まれ変わってくるのでしょうか。
4. 私を包んでいたラップをハラリと剥がされたよう。懐かしい……そう! この匂い、香り、照り、音の輪……の感激は演じるどころではありませんでした。